

内的理由と外的理由：再考

銭 谷 秋 生

Internal and External Reasons : Reconsideration

Akio ZENIYA

はじめに

ある人が一定の行為を行う理由をもつと見なされるのは、どのような場合だろうか。かつて私は、この問いを、イエスが語ったとされる「よきサマリア人の譬え」（ルカ 10.30-37）に即して提出したことがある〔銭谷 2005〕。

周知のようにこの譬えには、二種類の人間たちが登場する。エルサレムからエリコへ向かう途中盗賊に襲われ、けがをして呻いている者（文脈からしてユダヤ人）を目の当たりにして、「道の向こうを歩いて行った」ユダヤ教祭司とレビ人が一方において、「断腸の思いに駆られて」けが人を介抱したサマリア人が他方にいる。

前者がけが人に触れようとしなかったのは、「ひょっとして死んでいるかも知れない者に触れて儀礼的な穢れを背負わないために」用心したからであり、ユダヤ人の目から見れば当時としては当然の行為だった〔大貫 104-105〕。後者のサマリア人とは、もともとユダヤ人と同じ民族だったが、その居住地がアッシリアの属領となってから異民族との雑婚も行なったので、数世紀来ユダヤ人に排斥されていた人々を指す（「ユダヤ人はサマリア人とは交際しない」ヨハネ 4.9）。そのサマリア人がけが人を助けた。あたかも自分がサマリア人であり、相手がユダヤ人であることを忘れたかのように。

イエスは「この三人のうち、誰が盗賊の手に落ちた者の隣人になったと思うか」と律法学者に問い、律法学者は「その人を助けた人です」と答える。そこでイエスは言う。「行って、あなたも同じようにしなさい」と。

さて、この譬え話を聞いて、「道の向こうを通っ

て行った」祭司とレビ人に対して、何ほどの憤りを覚えた人が、次のようにつぶやいたとしよう。「彼らが神殿業務という重要な仕事に従事し、穢れを避ける必要があったことは分かる。しかし、直接けが人に手を触れなくとも、他の人々を呼んでくるなどの手立ては尽くすべきではなかったか。彼らにはそうする理由があったはずだ。そのことはイエスに対峙した律法学者でさえ理解したではないか」と。

しかし「彼らにはそうする理由があった」というつぶやきは、どのようにして真となるのだろうか。それとも真にはなりえないものなのか。これが、かつて私が提出した問いである。この問いに関して、「彼らにはそうする理由があった」という言明は真になりえない場合があると答えているメタ倫理学上の立場がある。それは「理由に関する内在主義」と呼ばれる立場であり、バーナード・ウィリアムズがその代表者である。その議論を手短かに確認し、それへの批判の試みを、主としてジェーン・ハンプトンの議論を追跡しながら行なってみるのが、小論の目的である。

I

ウィリアムズは、「行為者Aには行為xをする理由がある」という理由言明が真である場合を次のように確定している。

もしBがAについて「AにはΦする理由がある」と真に述べることができるとすれば、Aの現存する諸動機からスタートしてΦすることに到る健全な熟慮のルートがなければならない (if B can say truly of A that A has a reason to Φ, then

there must be a sound deliberative route to Φ ing which starts from A's existing motivations.)。ここから帰結することは、ある行為者が行なう理由のあることは、私がSと呼んだもの、つまり行為者の動機づけ状態の現存するセットの、関数であるということである [Wc 186-187]。

行為者に関する理由帰属言明（「Aには Φ する理由がある」）が真でありうるためには、 Φ することによって叶えられたり促進されたりする何らかの先行する動機群が行為者のうちになければならず、かつその動機群から Φ することに到る熟慮の道が開けていなくてはならない。ウィリアムズはこの先行する動機群(S)を「主観的動機群 (subjective motivational set)」とも呼び、これとの必然的な関連性をもつ行為の理由を「内的理由」と呼ぶ。すると「Sにおける何らかの要素が内的理由を引き起こす」というシンプルな行為理由解釈が出来上がる。ウィリアムズはこれを理由についての「準ヒュームモデル (sub-Humean model)」と命名し、改めて「Aがxをすることによって充足されるだろう欲求を持つならば、またその時に限り、Aはxをする理由を持つ」と定式化して、議論の基軸に据える。してみれば、「この状況においては、 Φ することが正しい」と多くの人が確信している事情があったとしても、その状況に立たされた者に Φ することと結びつく動機群の要素と熟慮作用が機能していなければ、その者には Φ する内的理由がないことになる。すなわち、こうだ。

(i) 内的理由言明は、Sに由来する何らかの適切な要素を欠く時、偽となる [Wa 105]。

ウィリアムズによれば、この見方は、あるものが行為の理由でありうるためには動機づけ効果 (motivational efficacy) を備えていなくてはならないという、理由であることの必要条件についての見解を含むことになる。この論点に関する説明を確かめておこう。次の二つの言明を考えてみようと言は言う [Wc 187]。

(R) Aには Φ する理由がある (A has a reason to Φ)。

(D) もしAが正しく熟慮したなら、Aは Φ する

よう動機づけられるだろう (If A deliberated correctly, he would be motivated to Φ)。

ウィリアムズによれば、(D) の条件節の理にかなった構成が与えられれば、「(D) のすべての生起は、(R)によって置き換えられる」[188]。つまり、ある行為者が自らの主観的動機群に内在する要素から熟慮のルートを辿ることで言明(R)を発見した時(つまり(R)の一人称形式に到達したとき)、初めてこの言明は真になる(その者にとっての理由という身分をもてる)のであって、行為者がそのようなルートを辿れない場合は、言明(R)はその者にとって偽となる。したがって理由によって、動機づけ効果は言わば本有的であることになる。

ところで、「(D) の条件節の理にかなった構成」ということでウィリアムズが考えているのは、理由についての「準ヒュームモデル」の洗練ということであると思われる。と言うのも、「準ヒュームモデル」では合理性という要素が考慮されていないからである。そこでウィリアムズは、よく知られたことだが、内的理由言明についての但し書きとして(i)に次いで(ii)と(iii)を提出している。この点についても確認しておきたい。

但し書き(ii)は、「Sの要素である欲求Dは、欲求の存在が誤った信念に依存しているか、あるいは Φ することが欲求の満足につながるというAの信念が間違っている場合は、Aに理由を与えない」[Wa 103]というものである。目の前の液体が本当はガソリンなのにジンだと思いこんでいるある行為者が、その液体をトニックと混ぜて飲もうとした場合、「ジントニックを飲みたい」という欲求は内的理由を与えるかと言えば、そうではない。欲求が依存している信念に誤りがあった場合、欲求が与える理由は合理性を欠き、したがって理由の名に相応しくないからである。このことは、「Aは自分についての内的理由言明を誤って信じることもある」という但し書き(iii)(a)を呼び出してくる。

但し書きの(iii)(b)は、「Aは自分についての真なる内的理由言明を知らないこともある」[ibid.]というものである。このようなケースとしてウィリアムズが考えているのは、Aはある事実を知らないのだが、もしそれを知っていれば、欲

求を満たすために重なる理由があることに気づいていただろうという場合と、重なることで満たされる要素がSに内在することにA自身が気付いていない場合である。しかしいずれの場合も、知られていない要素は、熟慮のルートが永遠に到達できないものだとはされていない。「主観的動機群を静態的に与えられたもの（statically given）と考えるべきではな」く、むしろそれは新たな信念を組み込んだり、古い信念を廃棄したりする動性をもつと、ウィリアムズは考えているからである [Wa 105]。

この動性は熟慮の力に由来する。それは、新たな信念の獲得や感覚の鋭敏化に促されて、主観的動機群の内的構成を組み替え、かつ全体として整合させる働きとして考えられている（この点で熟慮は、ヒュームが考えた理性の働きを遥かに凌駕している。したがって主観的動機群もまた、単なる情念と欲求の集合体ではない。それは「価値評価の性向、感情的反応のパターン、自分が大切にしているものへの誠実さ、行為者のコミットメントを具体化するような多様な企図」[Wa 105] などを含む信念集合体である）。ただし、熟慮の働きはあくまでも、現存する主観的動機群を出発点としており、その「Sにおける他の諸要素に制御されている（be controlled by other elements in S）」[Wa 104]。だから、「もしAが正しく熟慮したなら、Aは重なるよう動機づけられるだろう」という(D)言明が主張されるのである。

以上がウィリアムズによる「行為者Aには行為xをする理由がある」という理由言明が真である場合の説明の概略である。

ここから帰結するもの。それは、「行為者Aの動機から独立に真であり得る」行為の理由、すなわち「外的理由」は存在しないということ、したがってそのような理由をその行為者に帰属させる「行為者Aには行為xをする外的理由がある」という理由言明は偽となる、ということである。してみれば、イエスの譬え話を聞いて、「道の向こうを通って行った」人たちにも「けが人を助ける理由があったはずだ」とつぶやいた者は、偽なる理由言明を語ったことになる。以上のことをもつと一般的な言い方で述べれば、次のようになるだろう。ウィリアムズによる行為の理由の分析からすれば、「全ての人に、その主観的動機群のいか

んに拘わらず、一定の仕方で行為する一定の理由があるはずだ、ということは真ではありえない (it cannot be true that all people must have certain reasons to act in certain ways, regardless of their subjective motivational set.)」[Hampton 56]。

しかし、本当にそうなのだろうか。

II

ウィリアムズの理由分析は、カント主義者であるコースガードや、道徳的实在論者であるマクダウェル、あるいはサールによって批判的に検討されている。しかしここでは、ハンプトンによる吟味を参照しながら、考察を進めていきたい。

ハンプトンが集中的にウィリアムズ批判を展開したのは、『理由の解剖学』においてである。このなかで彼女はまず、「あるものが理由であるための必要十分条件は、そのものが行為者の主観的動機群の何らかの要素と熟慮的に結びついていることである」というウィリアムズの基本的見解を、「動機との熟慮的結びつき（deliberative connection with motives）要請（簡略化してDCM要請）」と命名する。そして、このDCM要請から導かれると多くの人が考えるいま一つの要請を「動機づけ内在主義要請（motivational internalist requirement）」と名付ける。この要請は、「あるものが理由であるための（十分条件ではないとしても）必要条件として、そのものが動機づけ効果をもつということがある」というものである。しかしウィリアムズは、但し書き（iii）(b)において、情報などの不足から「我々が知らない理由をもちうる」ことを認めていたから、正確に言えば、「動機づけ内在主義要請」は「仮定的動機づけ内在主義要請（hypothetical motivational internalist requirement）」と呼ばれるべきであり、その内容は、「あるものが理由であるための必要条件は、そのものが行為者によって知られていれば、動機づけ効果をもつということである」となる [Hampton 56]。このようにハンプトンは、ウィリアムズの議論の基軸にあるものを取りだしてから、批判的検討を始める。ここではそのうち、次の三点に関して、ハンプトンによる検討を確かめたい。(1) 仮定的動機づけ内在主義要請は、DCM要請から帰結するか。(2) 動機づけ内在主義要請は論証されているか。(3) DCM要請のための論証は、行

為の理由を（外的理由ではなく）内的理由に限定することに成功しているか。

（1）仮定的動機づけ内在主義要請は、DCM 要請から帰結するか。

ウィリアムズは次のように考えていると思われる、とハンプトンは述べる。「理由が行為者の理由としてカウントされるためには、その理由は行為者のSと連結していなくてはならない。すると、Sの要素は動機づけ効果をもつものだから、そのことが理由それ自体をも動機づけ効果をもつものたらしめる」と[H 57]。しかし、「理由がそこから導出される要素が動機づけ効果をもつということから、理由それ自体も動機づけ効果をもつということは帰結しない」[ibid.]。これがハンプトンの診断である。彼女はこれを次のように敷衍している。「ある行為者が、熟慮のプロセスを経て、自分が望んでいる対象qに到るにはpを行う理由があるという結論に達したとしてみよう。この理由はSと関連し、熟慮のプロセスにおいて発見されたので、行為者がもつ理由であると見えるだろう。しかし、その理由は行為者がもつ理由であるという事実によって、その行為者はpを実行するよう動機づけられもするということがなぜ帰結するのだろう」[H 57-8]。長寿への願いを持つ人が、そのために必要なことを熟慮し、暴飲暴食を避ける、適度な運動を欠かさない、禁煙するといったことを行う理由があると判断したからといって、それらがすべてその人を一定の生活様式を取るよう動機づけるわけではないだろうというわけだ。「理由は、行為者の内部において動機づけのうえで不活性（inert）になることがないとされるのはなぜか」[H 58]。

これによってハンプトンが言おうとしていることは、理由をもつということと、その理由が動機づけ効果をもつということとの間に、概念的な含意関係はないということだと思われる。そこにあるのは偶然的な関係でしかない。理由という概念的なものの発見や保持は、そのことがたとえ主観的動機群の要素と結びついているとしても、動機づけという心理的なものを必然的に帰結するのではない。したがってDCM 要請から仮定的動機づけ内在主義要請が論理的に帰結するとは言えない。

ハンプトンはこのように診断したうえで（この診断は私には正しいと思われる）、ウィリアムズが、本来は区別されなくてはならない二つの見解を概念的な含意関係にあるものとして扱っていることを指摘する。二つの見解とは、ハンプトンが「同定内在主義（identification internalism）」と呼ぶものと、動機づけ内在主義である。前者は、「行為者がxする理由をもつのは、xすることが、熟慮を介して、行為者の内的特徴と結びつく場合に限る」という見方を指す[H 58]。後者は、「理由は動機でもある」とする、仮定的動機づけ内在主義も含めて様々なヴァリエーションをもつ動機づけ内在主義である。この二つの見解は本来は概念的な含意関係に立たない。しかしウィリアムズは、xすることがそれと結びつくとされる行為者の「内的特徴」を主観的動機群としてのみ同定し、そうしたうえで、そのような同定内在主義に仮定的動機づけ内在主義を接ぎ木していたことになる。

しかし動機づけ内在主義は、DCM 要請から導出されないとしても、もっと別の論拠によって擁護されえないだろうか。もし擁護されうるならば、ウィリアムズによる「接木」には見込みがあるのかもしれない。これがハンプトンが問う二番目の問題である。

（2）動機づけ内在主義要請は論証されているか。

すでにハンプトンは、理由をもつことと、その理由が動機づけ効果をもつこととの間に、論理的な連結関係があることを否定している。しかし彼女は改めて次のように述べる。理由の「動機づけ効果は何らかの仕方によって」必然的あるいは不可避的であることを強調したい人は、そのことを論証しなくてはならない」。しかしそれは困難であるように思えると[H 59]。

ハンプトンはその根拠を委曲を尽くして論じているが、その中心に来る論点は、理由の合理性と行為者の心理の偶然性とを連結させる見解は信頼できないというものである。

例えば、エイズに感染することを避けるためには未使用の注射器を用いる理由があることを知っていながら、それによって動機づけられない薬物依存患者を考えてみるといい、と彼女は言う[H 69]。彼が動機づけられないからといって、エイズを避けるには未使用の注射器を使用する理由が

あるという事実もその理由の合理性も損なわれない。

あるいは（もちろんこれはハンプトンが提出している例ではないが）、貧困などの事情で満足に教育を受けられないまま成人し、働いている人がいたとしよう。その人は日本国憲法に国民の「教育を受ける権利」が明記されており、その権利を保障するものとして9年間の義務教育期間が設定されていることを知らなかったとしよう。したがってその人は、自らの主観的動機群を点検してみても、中学校に通うという動機づけを伴った理由を見出さないだろう。では、「その人にも、例えば夜間中学校へ通う理由がある」と言ってはならないのか。そうではないだろう。理由の合理性は、その理由が当てはまる行為者の心理の偶然性に解消されないからである。

あるいはここで、アマルチア・センが提出している「適応的選好形成 (adaptive preference formation)」という論点を参照してもいいかもしれない。人が多くの場合、一定の環境の中でそれに自らを適応させる形でその選好を形成するとしたら、例えば何世代にもわたって差別と貧困を強要されてきた人々は、その環境を変革したりそこから逃れたりする努力を払うよりも、むしろその環境に慣れ、それを運命として「甘んじて受け入れる」ほうを選ぶかもしれない。「希望を持てないほど虐げられた人々は、急激な変化を求める勇気を欠き、自分自身の願望や期待を、実現可能なわずかばかりのものに合わせてしまう傾向がある。彼らは、小さな慈悲にも大きな喜びを見いだせるように自分自身を訓練しているのである」[セン 406]。そのようにして適応的選好形成を行う人々は、「我々には差別や貧困から解放される理由がある」とは思わなくなるかもしれないし、解放を訴えることへの動機づけを押しつぶしてしまうかもしれない。しかしそれでも「いや、彼らには解放される理由はある」と言うことに、大きな問題があるとは思われない。

このように考えていいとすれば、動機付け内在主義要請は信頼できない見解であることになる。

ただしハンプトンは、「規範的必然性 (normative necessity)」というアイデアを用いる動機づけ内在主義のより弱いタイプに言及し、それがDCM要請に接ぎ木できるかどうかを検討している。こ

の点についても確認しておきたい。

このタイプの動機づけ内在主義は、コースガードに代表されるもので¹⁾、「行為者が理由を知っている限り、その理由の動機づけ効果はその行為者によって（形而上学的に）経験されるはずである (must)」という見解を退け、代わりに、「人が x する理由をもつならば、その人は x する動機づけを（合理的に）もつべきである (ought)」、あるいは「人が x する理由をもつならば、 x するよう動機づけられる場合にのみ、その人は合理的である」と考える [H 71]。この立場からすれば、人は動機づけが生じなくとも x する理由をもつことになり、したがって、あるものを行為の理由たらしめるのはその動機づけ効果以外の何かであることになる。

では、この種の内在主義はDCM要請に接ぎ木できるだろうか。もちろんできない。なぜならこの内在主義は、「動機が実際に理由に伴うことを要求するのではなく、伴うべきだと要求しているだけ」だからである。したがってこれはむしろ、動機づけ外在主義と親和的なのである。

* 加えて、ハンプトンによれば、「人が x する理由をもつならば、その人は x する動機づけを（合理的に）もつべきである (ought)」と本当に言えるだろうかという点にも疑問が残る。なぜなら、ジョゼフ・ラズも言うように [Raz 179-182]、「ある人が x する決定的な理由をもつような状況にあっても、その人を x するよう動機づけるものは、その人がもつ x する理由以外の何かである、しかもその場合、その人の理由を破壊するものはない、というケースが時折ある」からである。理由と動機づけをめぐるこのポイントを明確にするために、ラズは、「理由に従う (comply with a reason)」と「理由に適合している (conform to a reason)」を区別するよう提案する。前者は、その理由によって一定の仕方で行うよう動機づけられることを指し、後者は、理由が指令することを行うが、しかし理由とは別のものによって動機づけられていることを指す [H 72-3]。これが正しければ、「 x する理由をもつことは、 x するよう動機づけられることを理性的に要求されることだが、 x す

る理由をふまえて (on one's reason) 行為するように、つまり理由に従って (comply with a reason) 行為するように、必然的に動機づけられることではない」という立場が成り立つ [H 73]。これは動機づけ外在主義も同意できる見解だろうとハンプトンは述べている。

Ⅲ

三番目の問題に移りたい。問題はこうだった。DCM 要請のための論証は、行為の理由を（外的理由ではなく）内的理由に限定することに成功しているか。

改めて確認すれば、外的理由を述べる言明は、その内容がどうであれ、行為者にとってはその要求どおりに行為する動機を主観的動機群内部に見出し得ない、そういう言明だった。してみれば、「前提により、行為者には、そこから熟慮し、新しい動機に到る、そういう動機がそもそもない (ex hypothesi, there is no motivation for the agent to deliberate from, to reach this new motivation)」[Wa 109]。したがって行為者の行為の理由は内的理由に限定される。これによって、全ての外的理由言明は偽となる。このようにウィリアムズは述べていた。このような考えへとウィリアムズを導いている事情の一つは「理由は動機づけ効果をもたなくてはならない」というものだが、これが必ずしも正鵠を射ていないことを前節で確認し終えた今、「我々は、主観的動機群から熟慮的に引き出されるのではない理由をもつことはないのだろうか」という問いを問わなくてはならないだろう。

このことに関して私はかつて、ピーター・ウィンチを参照しながら [Winch 61-62]、例えばコミュニケーションの継続の根源的条件としてある「正直に話す」などの諸規範が行為者の主観的動機群を斟酌することなく課せられてくる事態に注目し、次のように述べた。「通常のコミュニケーションの場で、正直に話すことが正しいならば、そのように話す理由が存在するのであり、私は発話において常にすでにその理由に拘束されている」[銭谷 9]。この理由は、私の動機群や欲求に左右されない理由であり、たとえその理由が指令することを行う動機を自ら紡ぎだすことがないとしても、しかしそれを受け入れて行為せざるを得ない、

そういう理由である。このような、行為者の恣意から独立した、規範性をもつ理由の存在を指摘することで、ウィリアムズの理由分析を批判する道がありうると思われる²⁾。

しかしハンプトンは多少異なった道をとる。彼女は、ウィリアムズの論理に内在しながら、次のように述べる。「DCM 要請のための論証の仕方が、ウィリアムズをして、DCM 要請を満たさない理由の存在にコミットさせてしまう」[H 57]。これは何を謂っているのか。

ウィリアムズは、「(D) もし A が正しく熟慮したなら、A はΦするよう動機づけられるだろう」という言明における条件節の理にかなった構成が与えられれば、(D) は「(R) A にはΦする理由がある」という言明によって置き換えられると述べていた。これによれば、「正しい熟慮」が行為の理由を、行為者が単なる衝動や情念に駆られているといった事態から区別する指標となる。ただしそのような熟慮は、カントにおける純粹実践理性のような行為者中立的な合理性を担うのではなく、あくまで「Sにおける他の諸要素に制御されている」という意味で行為者依存的な合理性を担う。しかし、「思考の一定の形だけが熟慮的であり、熟慮のそうした形がよくなされたり悪くなされたり、正しくなされたり正しくなくなされたりする」のではないか[H 75]。つまり熟慮のプロセスとは、知性の恣意的な操作ではなく、「規範的に定義されたプロセス」なのではないか。このようにハンプトンは問う。もしそうだとすれば、正しいあるいはよくなされた熟慮を定義する規範が存在することになるだろう。そして「正しくなされた熟慮を介して、規範性が理由そのものに入ってくる (it is via these (correctly performed) deliberations that normativity enters the reasons)」[H 76] ことになり、そのようにして理由はまさに理由になりうるのではないか。

例を用いて考えてみよう。ある人は、約束をしてもそれを実行しようという意欲が湧いてこないとしてみよう（ウィリアムズが「手に負えない (recalcitrant) 人」と呼ぶケースである [Wb 571]）。この人においては、その主観的動機群の要素から約束の履行に到る熟慮的ルートが通じておらず、したがって約束を履行する内的理由が成立しない。むしろ約束を顧みない内的理由が成立

してしまう。そのような人がいるとして、我々はその人が「正しい熟慮」をしているとは考えないだろう。「約束は履行されるべきである」という公共的な規範を組み込みうるときに初めて、その人の熟慮は「正しい」熟慮となりうるからである。

別の男は、その妻を乱暴に扱うだけで、もっと優しく扱うことができない。その男の主観的動機群には、妻を遇する仕方を変えることで満たされるような何かがまったくなくしてみよう [Scanlon 367, cf. Wd39]。ウィリアムズが「思いやりがなく、冷酷で、心ない」と呼ぶ者である。スキャンロンも言うように、このような呼び方自体が「ある種の欠損 (deficiency) のためにこの男を告発することを含んでいる。つまり、我々が理由と見なす一定の考慮によって動機づけられることに失敗しているという欠損である」[ibid.]。その男が妻に対して、自らの行為の理由としてあれこれ述べ立てるとしても、我々はその理由を「正しい熟慮」を介した理由とは考えないだろう。通常、他者を傷つけることを正当なものとする熟慮（あるいは、その他者は傷つけられて当然な存在であるとする熟慮）は、そもそも熟慮とは呼ばれないからである。

ハンプトンによれば、熟慮とは「規範的概念」であり、したがって正しくなされた熟慮の例と見なされる実践的推論の形も規範によって定義される。そのような規範が、「我々はどのように熟慮すべきなのか、何が正しい熟慮と見なされるのか、そしていつ我々は熟慮すべきなのか、といったことを指令する理由も含めて、およそ理由なるものを生みだす」のである [H 76]。もちろん、我々は理想的に合理的な存在者ではないから、例えば「どのように熟慮すべきか」についての理由の指令を取り違えたり、意識できなかったりもする。チャーニアクは、炎を上げている火はガソリンに点火できると信じており、自分が今手にしているマッチには火がついているとも信じており、自殺したいとは思っていない人が、それにも拘らず、ガソリントankが空かどうかを確かめるためにタンクの中にそのマッチをかざしてしまうという例を出しながら、我々の実践的推論がなぜ失敗するのかを論じている [チャーニアク 89-90]。これは人間の記憶の構造をめぐる問題だが、しかしこのような失敗が理由の規範性を破壊することはな

い。不幸にして炎に包まれてしまった人にも「ガソリントankの中では火のついたマッチをかざさない」理由があったのである。

してみれば、「行為のための理由を引き出す熟慮を、どのように、そしていつ用いるか」という問題は、その瞬間にたまたま行為者の動機となっているものをベースにして行為者が定義できるものではない」と言わざるを得ない [H 77]。ウィリアムズもこのことを受け入れるだろうとハンプトンは述べる。「彼は、理由に基づいて行為する行為者が合理的であると考えられうるためには、行為者のSにおける動機が真正の理由に転換されるために熟慮の一定の形に従わなければならないと要求する」からである [H 77-8]。しかしそうになると、一定の形の熟慮に従事する理由は、単なる動機と同一視されないことになる。こうして、「正しい熟慮」について語ることは、行為者の現に有する動機群から調達されうるものを凌駕する要素を取り込まなくてはならない場合があることが分かる。

この「凌駕する要素」についてハンプトンは、マクダウェルが用いる「訓練 (an exercise)」という概念を引用して説明している [cf. McDowell 99]。その訓練とは、「理性によって新しい動機づけを生みだす」訓練、あるいは「我々がそこからスタートする動機づけがどうであれ、合理的に強制的なものであるような訓練 (an exercise that would be rationally compelling whatever motivations we start from)」である。「正しく熟慮する」ことはこうした訓練を必要とする。これは外的理由論者が道徳的理由を推奨する場合に強調することだが、しかし、ウィリアムズが「もし正しく熟慮したなら」という条件節の理にかなった構成に基づいて行為の理由を規定しようとする限り、彼は外的理由論者と「まさに同じ仕方」で [H 78] 語らざるをえないのである。ハンプトンの総括的な文章を引用したい。

こうして我々は、ウィリアムズ自身の説明の中に、行為のための外的理由を同定した。この理由は、どのように熟慮すべきか、またいつ一定の仕方でも熟慮を遂行すべきかということを含む場合には、その理由としての本性が動機であるということによっても、動機と熟慮的に結び

ついているということによっても、説明されえない。この理由は同定内在主義の網の目をすり抜ける [ibid.]。

以上我々は、「行為者Aには行為xをする理由がある」という理由言明がどのような条件下で真となるかについてのウィリアムズによる分析と、ハンプトンによるその批判の試みを検めてみた。ハンプトンによれば、理由言明のなかには、行為者の主観的動機群との結びつきを必須としないものもありうるものであり、したがって「理由に関する内在主義」は行為の理由という概念を究め尽くしてはいない。

私はハンプトンのこの診断は基本的に正しいと考える。しかしもちろん、行為の理由の探究をこれで終えるわけにはいかない。行為者の主観的動機群のいかに拘わらず、全ての理性的な人に一定の仕方で行為する一定の理由があるのかどうか。あるとすれば、そのような「外的理由」が成り立つその機序はどうなっているのか。また、行為の「道徳的」理由なるものは、その妥当性をどこから得ているのか。つまり「行為者Aには行為xをする道徳的理由がある」という理由言明を真たらしめるのか何か。こうした問題が控えているからである。これらの問題は、最終的には「なぜ道徳的であるべきか」という倫理学の根幹に位置している問いを指し示しているだろう。これらの問題に取り組むことを次の課題として、ひとまず擱筆したい。

【註】

- 1) コースガードが提出している内在主義要請はこうである。「実践的理由要求は、その要求が行為の理由を伴って本当に我々に提示されるならば、合理的な人を動機づけうるものでなければならない」(Korsgaard 317)。
- 2) この道を辿り、「行為への理由で欲求に依存しないものは、いかにして創り出されるか」という問いを展開しているのがサールである。彼はこの問いに関して、「真実を語ることへのコミットメントが言明をなす行為に内在的であるのとちょうど同じように、約束を守る義務は約束をする行為に内在的である。しかし古典モデルには、この事実を取り扱うべきがない」[Searle 193] と述べている。ここに言う古典モデルには、ウィリアムズがその流れをくむヒューム主義が含まれる。

またここに言う「内在的」とは、言明をなしたり約束をしたりといった行為の構成規則となっているという事態を、したがって行為者の欲求に依存しない、あるいはそれによって左右されないという事態を指す。しかし事の詳細は別稿に譲らざるを得ない。

【文献表】

- 天野 真将 (2010) 「バーナード・ウィリアムズにおける行為の理由への社会的アプローチ」(関西学院大学研究年報 44)
- Cherniak, C. (1986) *Minimal Rationality*. (MIT Press) (柴田正良監訳『最小合理性』勁草書房)
- Chung-Hung Chang (2007) Why reason internalism does not support moral internalism. (in *Annual Conference on Value and Reality*, Taiwanese Philosophical Association, Tunghai Uni.)
- Dancy, J. (1993) Internal and external reasons. (in *Moral Reasons*. Blackwell)
- Hampton, J.E. (1998) The Anatomy of a Reason. (in *The Authority of Reasons*. Cambridge UP)
- 河田健太郎 (2004) 「個体における実践的合理性—ウィリアムズとマクダウェルにおける『正しい熟慮』」(倫理学年報 Nr.53)
- Korsgaard, C.M., (1996) Skepticism about practical reason. (in *Creating the Kingdom of Ends*. Cambridge UP)
- McDowell, J. (1998) Might There Be External Reasons? (in *Mind, Value, and Reality*. Harvard UP)
- 宮田 健一 (2004) 「道徳的である理由」(広島大学倫理学会編「倫理学研究」15)
- 大貫 隆 (2003) 『イエスという経験』(岩波書店)
- Raz, Joseph. (1990) *Practical Reason and Norms*. (Oxford UP)
- Scanlon, T.M. (1998) Williams on Internal and External Reasons. (in *What We Owe to Each Other*, Harvard University Press)
- Searle, J.R. (2001) *Rationality in Action*. (MIT Press)
- Sen, A. (2009) *The Idea of Justice*. (Penguin Books) (池本幸生訳『正義のアイデア』明石書店)
- 鶴田 尚美 (2007) 「ウィリアムズの内的解釈と規範的理由」(*Nagoya Journal of Philosophy* 6)
- Williams, B. (1981) Internal and external reasons. [Wa] (in *Moral Luck*. Cambridge UP)
- (1995) Ethics. [Wb] (in *Philosophy 1 a guide through the subject*. ed. by A.C. Grayling)
- (1995) Replies. [Wc] (in *World, Mind, and Ethics*. ed. by J.E.J. Altham and R. Harrison)
- (1995) Internal Reasons and the Obscurity of Blame. [Wd] (in *Making Sense of Humanity*.

Cambridge UP)

Winch, P. (1972) *Ethics and Action*. Routledge and Kegan Paul.

銭谷 秋生 (2005) 「行為の理由についての研究ノート
—よきサマリア人の譬えから哲学的分析へ—」 (茨城キリスト教大学紀要第 38 号)